歴研おかやま
okayama history research society

第２７号
令和 2 年 3 月２３日発行
会 員 募 集 中
年会費　3,000 円
10月以降入会 1,500 円

令和２年度定期総会 中止の案内

令和２年度の定期総会を下記の要領で計画してきました。が、新型コロナウィルスの蔓延の恐れの観点から中止することに決しました。

下記の会長の「歴研展望」にあるように、講演会等は後日適当な時期に開催する予定です。

日　時：令和２年４月 29 日（水・昭和の日）　受付 12:30 ～

場　所：岡山県立図書館　２階　多目的ホール
岡山市北区丸の内 2-6-30　TEL：086-224-1286

総　会：13:00 ～ 13:30
議案審議、その他

記念講演：13:40 ～ 16:10

小谷省吾氏（元、興譲館高校長、現、就実短大教授）

演題「阪谷朗廬、渋沢栄一の思いをつなぐ教育を現代に」

野島　透氏（元、財務省九州財務局長、現、地方公共団体金機構理事）
山田方谷の直系６代目、方谷関連の著書 10 冊目「夢を駆け抜けた飛龍―山田方谷」を２月に発刊。

演題「山田方谷を生んだ歴史舞台岡山」

懇親会：17:00 ～ 19:00
希望者による懇親会を「プュアリティまきび」２階「ルビーの間」にて予定しています。希望者は当日お申し込みください。

歴・研・展・望

今日３月８日、裏山で鶯の初鳴きを聴く。整然とした「ホウホキェキョ」だった。大抵､スタートは「ケキョ。ケキョ」の拙い鳴き声です。が、例年通りの美しい自然の営みを感じました。

しかし、今、世相は「新型コロナウィルス」の伝染を止めようと大わらわの状態です。大相撲春場所も無観客の状態での開催です。学校も休校しています。

岡山歴史研究会も４月 29 日の総会は中止し、資料送付に代えさせていただきます。講演会も後日適当な時期に開催させていただきたいと考えています。

最近は故郷の歴史、特に山城の研究も多く、関ヶ原の戦後「一国一城令」により多くの山城は閉城になり、全国で 170 城余を残すのみとなりました。その中で、美濃岩村城（岐阜県恵那市)、大和高取城（奈良県高取町)、備中松山城が日本三大山城と言われています。

明治６年の城郭廃止令（1872 年）により備中松山城以外の二城は天守その他の建造物は取り除かれました。が、石垣をはじめ、城郭の一部は現存し、昔日の威容を想起させます。

美濃岩村城は標高 721mの累々とした日本一高い山城であり、天然の峻険な地形を利用して築城され、石垣は現存し、当時の威容を誇り、麓には大鼓丸が復元され、城下町は整備されています。

大和高取城は奈良盆地と吉野地方との間に障壁のように連なる山塊中の高峰にあり、標高 583.9m、全国で比高(山頂と麓の高低差)が一番大きく、城下町から446mあり、中腹から大和三山を望むことができます。

備中松山城は山陽と山陰の間に連なる臥牛山頂 430mに天守を築かれ、現存天守閣が聳える唯一の山城です。城下町は武家屋敷と町屋が判然とした町割りとして残っています。

学問の要として､岩村城には知新館､高取城には明倫館､備中松山城には有終館があり､藩を支える人材を育成するとともに全国的に活躍した人材も輩出しました。

岩村藩出身の佐藤一斉､高取藩の谷三山､備中松山藩の山田方谷などが挙げられます｡城下には私塾､寺子屋などを中心として学問が盛んとなり､人材も登用され､勢いのある城下町となりました。（会長　石井　保）

地方的銀行合同の先駆者　大原孫三郎

―全国の先駆となる一県一行の中國銀行の設立―（その4）

髙橋　義雄（会員）

６　経営不振に陥る第一合同銀行と山陽銀行

（4）大蔵省の厳しい査定で不良資産増加

1929 年（昭和 4 年）10 月から 11 月にかけて、山陽銀、第一合銀は相次いで大蔵省の検査を受ける。上山監視官他 2 名の検査官が 10 月 21 日に岡山を訪れて、美作勝山銀行を検査、翌 22 日には山陽銀へ臨店し、出納検査と有価証券の検査を行い、提出すべき諸表の指示を行った。次いで 10 月 25 日から 10 月末まで山陽銀の本格調査に入った。

11 月 2 日から第一合銀の検査が始まり、10 日間に亘って行われた。この検査で両行の不良債権の調査が徹底的に行われた。結果、両行ともに不良資産が予想以上に多いことが判明し、そのためこの検査を契機として、両行は大蔵省から一層強力な合併勧告を受けた。

山陽銀では､1928 年（昭和 3 年)､倉敷大橋銀行を合併したことに起因する不良債権の存在が判明した。大橋平衛門に対する 380 万円の多額の不良債権があった。倉敷大橋銀行は、大原家と並ぶ倉敷の名門の大橋平右衛門が大正 7 年に資本金 50 万円で創立した銀行である。頭取大橋平右衛門は倉敷大橋銀行からの融資金で北海道室蘭の 137 町歩という広大な土地に投資したが、その土地の活用や転売が失敗したため､倉敷大橋銀行はこの融資金を不良債権として抱えることになった。その事実が広く知られたため、倉敷大橋銀行を合併した山陽銀行の経営内容も疑われることとなった。

（5）黒田大蔵省次官及び井上日銀頭取の合併慫慂

第一合銀と山陽銀を取り巻く内外の情勢から合併の気運が一層高まる。当時の君島日本銀行岡山支店長は「支店長会議で上京したあるとき、藏相だった井上準之助さんから呼びつけられて両行合併問題を世話しろと言いつけられた。次いで木村さんからも呼ばれて同じことを申し渡された。ところが肝心の当時の土方総裁、深井副総裁はこの問題については全く消極的で日銀の介入を避けるという意向が明示はされないが、容易に窺われた。しかし両行の状態を見、また岡山地方の様子をみると猶予はならぬ。地方人士両行いや大原・土井の両財閥に対し好意ばかりはもってない。両行間でひそかに議が進められていることが漏れて来て、そろそろ世間の口の端にものぼり『マイナスとマイナスを合せてもプラスにならぬ』などという放言さえ耳に入るようになってきた。自分としては若しものことが起こっては一大事、出来あがったものが丈夫なものなら結構と腹を決めた」

岡山県矢掛出身の木村清四郎日本銀行副総裁、同じく津山出身の黒田英雄大蔵大臣等も合併の斡旋に乗り出した。「両行の現状からみて、合併は両行にとってのみならず、地元金融界、産業界にとっても極めて有益なことであると同時に、両行が一つになってこの難局を切り抜けることは中心銀行としての使命である」と熱心な合併勧告を行った。大蔵省は 1930 年（昭和 5 年）九月下旬、両行の幹部を相次いで東京に呼び寄せ、前年の検査結果を踏まえて、「この際なにをおいても、まず合併し、目下の難局を切り抜けるべきである」と強力な合併勧告を行った。上京した役員は、第一合銀からは大原頭取、榎取締役の二名で、中村常務取締役も後日加わり、山陽銀からは土井頭取、高井常務取締役、淀川監査役の三名であった。

両行の首脳も、岡山県出身の政界・金融界重鎮の度重なる説得や大蔵省当局の強力な勧告に加え、地元における香坂岡山県知事や君島日本銀行岡山支店長等の細かい配慮と熱心な勧誘等によって、「この際小異を捨てて大同につき、経営を合理化することが県下金融界のために緊要である」と認めるに至り、10 月初め遂に合併を決意した。合併交渉は両行のごく少数の幹部のみで極秘に進められた。東京という大都会で行われたため、世間には全く知られず、10 月 6 日、「山陽新報」にスクープされた時も「何かの間違いではないか」と、一般の人々は勿論、両行の多くの重役行員さえも合併話を疑っていた。こうして完全に機密が守られたことも合併が成功した 1 つの要因になっている。

（6）不良資産の整理と合併声明

合併についての基本的な合意は整ったが、合併契約書の調印までに、不良債権の鎖却、新銀行における両行役員の比率、従業員の処遇問題などの協議が難航を極め、ようやく 10 月 14 日に合併仮契約書及び 3 条からなる覚書が締結された。

合併の最大の難問は、両行が抱えた不良資産の償却であり、これが合併交渉を延引させる要因であった。両行の合併前の資本金は第一合銀が 1,482 万円（うち払込済み 655 万 5 千円）山陽銀が 1,135 万円（うち払込済 329 万 1 千円）であり、合併仮契約書並びに合併覚書書に基づく資本金の減少額はそれぞれの払込資産金の 3 分の 1 となった。そしてその補填額として、両行の積立金、繰越金の取崩額を計上したので、新銀行の株数は 30 万株となり、新銀行の資本金は 1,500 万円と決まった。

こうして、両行は難交渉して妥協の上、漸く 3 分の 1 の減資と積立金の取崩によって欠損金の補填を行うことができたのである。しかし、これは未だ非常に不徹底な不良資産の整理であり、創立後に問題は繰り越され、長期に亘り、新設後の銀行経営に大きな苦汁を与えることとなる。

合併仮契約書の締結後、両行首脳は大蔵省と日本銀行を訪問し、合併成立の報告と謝意を表して帰岡した。両行は同年 10 月 19 日にそれぞれ取締役会を開催して、合併案を審議した。第一合銀側はなんら異議も無かったが、山陽銀側では合併条件である両行の不良債権額や取締役選出比率について異議が出されて会議が紛糾した。そのため、当日正午に予定されていた両行頭取による合併声明の発表ができなくなった。山陽銀側は結局、土井頭取に一任することとなったのである。土井頭取の合併意志は堅固であったので、ようやく午後 6 時過ぎになって両行頭取は、第一合銀本店において次のように合併声明を発表した。「県下においては、第一合銀と山陽銀の二大銀行が対立していましたが、今回大蔵省並びに日銀当局の熱心な御慫慂と香坂知事、君島日本銀行岡山支店長の深甚なる御配慮と、県出身の先輩、木村清四郎、黒田英雄両氏の御親切なる御斡旋とによりまして、両行がいよいよ合併して新銀行を来る 12 月 21 日に設立するとの機運に到達したことは、県下金融界のために洵に喜ばしいことと思います。新銀行といたしましては、銀行経営が合理化されて銀行自体が安固になるとともに、従来よりも一層地方産業のため理解ある働きをしたいと思いますから、どうか銀行を利用される方々の厚きご援助と各方面のご指導をとを切望して已まない次第であります」（昭和 5 年 10 月 20 日付「山陽新報」）

この合併で尽力した香坂岡山県知事は「新銀行の設立は岡山県の誇り」と称賛、君島日本銀行岡山支店長も「両銀行合併は地方金融界のトップにして、今日逸早くこの挙に出たことは両行当事者の明敏と果断によるものにて推奨に値する」と高く評価した。

7 「一県一行」の先駆―中國銀行の成立―

（1）「一県一行」の先駆―中國銀行の成立―

中國銀行の行名は、既に 1930 年（昭和 5 年）10 月に大原第一銀行頭取の依頼により、井上準之助蔵相によって、「中国地方一円に伸びるように」との意図のもとの命名されていた。

両銀行は、合併仮契約書に従って 1930 年(昭和 5 年)11 月 4 日に臨時株主総会を開催して、合併仮契約書を承認、次いで新銀行設立委員として第一合銀は大原孫三郎、中村純一郎、山陽銀側は土井通博､高井慎一郎をそれぞれ選任し､設立委委員長に第一合銀大原頭取を互選した。体制が整い、いよいよ開業に向けて鋭意、諸準備作業を進めた。また、新しい銀行名を基に新行章も制定した。

創立総会は昭和 5 年 12 月 21 日（日曜日）第一合銀本店にて開催された。大原第一合銀頭取の議長の下に、いずれの議案も満場一致で可決され、総会は滞りなく終了した。

中國銀行の創立時の預金高は一躍 9,200 万円となり全国地方銀行中トップの預金高を有する銀行になったのである。

資本金、1,500 万円（払込資本金 670 万 3,410 円）本店岡山市、支店 62 か店､出張所 70 か店､預金､9,200 万円､貸出金 7,700 万円、職員 943 名

中國銀行初代頭取　大原孫三郎

こうして岡山県内金融界を二分していた、第一合同銀行と山陽銀行が合同して中國銀行が成立した結果、これ以外の岡山県下で本店を有する普通銀行は中備銀行ほか小規模の 4 行のみになった。ちなみに岡山県内の各銀行の預金シェアをみると、1927 年（昭和 2 年）では第一合銀が 53.7%、山陽銀が 35%を占めているが、1930 年（昭和 5 年）末では中國銀行が 96.9%を占めていて圧倒的である。その他、中備銀行、美作勝山、後月、勝英の 4 行があるが、各銀行の預金シェアは非常に少ない。従って、この時点でほぼ一県一行が達成されたといえよう。従って、岡山県では全国に先駆けて、政府の進める一県一行が成立したことになったのである。

一県一行の実現は金融界の安定にとつて欠くべからざるものであり、画期的な大きな事業として全国的に高く評価された。

大原頭取は 1919 年（大正 8 年）に前項に先がけて、地方的銀行合同を成し遂げて第一合銀を成立させており、それに並ぶ偉業である。

創立総会の翌日の 1930 年（昭和 5 年）12 月 22 日に「山陽新報」は、紙面 1 ページを全て中國銀行創立関連記事に割いて報道した。

まず上段の大見出しで「地方産業の開発を目指す全国有数の『中國銀行』生る　頭取大原孫三郎氏、副頭取土居通博氏　その使命は重且大である」「大蔵当局の慫慂する一県一行の理想実現　当務者も産業合理化に目醒めて」と表現した。中段には大原頭取、土居副頭取他役員や支店長を紹介し、下段には新銀行設立に対する香坂昌康岡山県知事、君島一郎日銀岡山支店長の談話を掲載している。

「新銀行の前途を祝福す　設立は本年掉尾の快挙」－香坂岡山県知事談

「本日ここに株式会社中國銀行の誕生を迎えたるは本年掉尾の快挙として愉悦を禁ずる能はざるところである。顧みるに、元第一合同、山陽銀行の合併契約の成立したるは去る 10 月 14 日にして、爾来僅か 2 か月を擁したるに過ぎない。その間極めて順調に万事が進捗したるは一に当行重役諸君の熱誠のいたすところであって、その実現の早かりしは特に欣快堪えない処である。将に昭和 6 年の新春を迎えんとするも、財界、不況の声未だ去らず、責や実に重且大なる秋である。更始一新新陣容の下に益々その機能の合理化に努め、県下唯一の大銀行としての使命を全うせんことを切望する次第である。この機会において重ねて新銀行の申請を祝福し、併せて将来の多幸を祈ってやまない」

「地方銀行のよいお手本だ」―君島日本銀行支店長談

「着々準備が整っていよいよ今日めでたく創立開業となった中國銀行に対しその洋々たる前途を祝福する。今度の新立合併はその規模及び意義から行って我が国銀行史上彼の昭和 2 年 9 月、川崎、第百両行以来の大合併であり、しかも同一県下に対立せる銀行同士の合併たる点よりして殊に玄人筋の注意を引いている事おびただしく、先月下旬大阪における銀行大会に列席した際にも他地方銀行の常務者より『実によいお手本を示してくれた』という言葉を聞いたこと一再でなかった。おそらくこれが先駆となって我が国銀行史上に一時期を画する様なことにはなりはせぬかと思われる。従って、それだけ新銀行の将来に対しては世の視線を寄せ集めているのであるから、今後新銀行は岡山県を本拠とせる中国の銀行としてその内容の安固充実、お客への好サービス、地方経済の貢献度において、真に地方大銀行のよいお手本となるの優良実績を挙ぐる事を期せねばならぬ。その為には当務者並びに関係者の精励努力は勿論のこと地方人士各位においてもこれが充分なる利用と共に不断の援助を寄与されん事を希望する次第である」　　（完）

【逸話】中國銀行という銀行名の命名について

「岡山で第一合同と山陽との合併が大体固まってきたとき、私が支店長会議で上京すると、大蔵大臣の井上さんの秘書官から電話で、『すぐ来い』というので行ってみると、「大原から頼みがあったから、新銀行にはどういう名前をつけるか、お前が名を選んでみろ」ということであった。一応引き下がって車の中で考えながら銀行に帰ってくる。

山陽銀行と第一合同銀行との合併であるから、こういう場合は、普通は山陽合同銀行とか、第一山陽銀行とかいう名前を当然考えるはずである。山陽合同銀行とでもするのが無難であるのだが山陽が合同の上に着くのは大原が承知しない。第一山陽になると、これは山陽の方に難色がある。あるいは山陽中央銀行とでもするかというので、私は山陽合同銀行、第一山陽銀行、中国銀行、山陽中央銀行、備州と讃岐で（第一合銀は香川県にも延びていた）備讃銀行等の名を考えた。その内では中國銀行が一番良いと思ったが、これを一番初めに書くのは拙い。それで前掲 5 つのうちの 3 番目に書き、封筒に入れてすぐに大蔵省にとって返し、井上さんにさし上げた。井上さんは丁度お出かけ前で立ちながら見られ、卓上から筆をとって前の 2 つを消し 3 つ目の中國銀行の上に〇を付け「これがいい」と。これで中国銀行と決まる。」（君島一郎著『私の銀行ライフ』より）

1 面全面にて中國銀行設立を報道する山陽新報（昭和 5 年 12 月 22 日）

―郷土に輝く聖人―　仏教の宗教改革者「法然」その3

山田　良三（会員）

父の死は法然出家の後？

法然上人

平成 31 年 1 月、哲学者の梅原猛氏が 93 歳で亡くなられた。私が読んだ法然上人についての本の中で特に印象的だったのが梅原氏の『法然の哀しみ』でした。梅原氏はこの本の「伝記が語る法然像」の項の中で、代表的法然伝として知られる「四十八巻伝」（法然上人絵伝）とは全く異なる事実を語る「醍醐本」に着目して記事を書いている。

醍醐本とは、大正 6 年に真言宗醍醐派総本山醍醐寺の塔頭・三宝院で発見された『法然上人伝記』で、著者は鎌倉時代前期の浄土宗の僧・源智です。法然が晩年最も信頼し、財産の管理も任せ、入滅時まで寄り添わせていた弟子で、平家の遺児ともいわれている。「一枚起請文」を法然に乞い、授かったのもこの源智です。梅原氏は「親鸞の『歎異抄』に比すべき『醍醐本』」とこの醍醐本を高く評価している。

梅原氏は、浄土宗の三田全信師の研究による著書『成立史的法然上人諸伝の研究』の中に、「（醍醐本は）潤色の少ない稀な好記録集である。」「法然諸伝の根幹をなしている」と記述して、醍醐本の価値を高く評していることを引用して、「法然伝の比較研究はこの三田氏の研究でほぼ大成したと思う。」と評価し、「三田師の説にもとづいて、法然の人間像を考えてみよう。」と、醍醐本を参考にして法然の人間像に迫っていくと記している。

これまで法然出家の経緯は、「四十八巻伝」などによれば法然が 9 歳の時、預所明石定明の夜襲を受け、亡くなった押領使の父漆間時国の遺言「敵に仕返しをして罪業を繰り返さず、出家して菩提を弔ってほしい」に従い、叔父の観覚が住職の菩提寺で修行を始めたというものでした。（預所は荘園の管理人で、押領使は警察のようなもの）

ところが醍醐本の記述は異なっている。菩提寺で修行していた法然は、その才を見込んだ観覚の勧めで叡山に登ることになり、その出立の際に父・時国が「私は殺されるかもしれないが、その時には菩提を弔ってくれ」と告げたと記述されている。そして叡山に登ったその年（久安三年）の暮れに、父の訃報が叡山の法然のもとに届いた。この知らせを聞いた法然が、遁世しようと師の叡空に申し出た処、「遁世するにしても無知ではよくない。天台三大部を学んでからにしなさい」と諭され、そこから本格的修道が始まったと醍醐本には記されている。つまり、父の死期が異なっている。

梅原氏は法然が日本の宗教史に残る大改革を実現するまでの思考や心の軌跡を紐解いている。「私日記」以降「四十八巻伝」に至る法然上人伝は誕生の奇瑞などを様々に描いて法然を聖人化、「法然を遠ざける過度の聖人像」として描いている。物語としては面白いのですが、事実かどうかはわかりません。これらの法然伝は浄土宗が形成され、宗団の拡大が図られていた時代に書かれた伝記です。自分たちの宗祖を聖人として崇めることは、教団の維持発展のために必要なことだったのでしょう。常識を超えた逸話で開祖を崇め奉るのはどの宗派でもありがちなことです。ただ宗教家とその教えを深く理解するためには、フィクションを取り除き、現実に生きる人間としての苦悩や哀しみをどう克服していったのかという事実を知ることが重要です。　（完）

『犬養木堂＝近代日本の光と影の史実を追って』

板野　忠司（会員）

1 【はじめに】

歴史は、『史実』を基本とする。従って、神話・伝説・伝承・語りはもとより、歴史小説・時代小説、大河ドラマなどとは、似て非なるものである。客観的な事実＝史実のみが歴史の構成要素である。科学としての歴史は、時系列で確定した客観的『史実』をベースに論じられる。そのうえで見解として諸説あるのは、『史実の評価』であって、歴史学会や考古学学会で論文として当否が決着し、定説化されていく。史実に脚色や推測を加えたり、時系列を逆転させたり、意図的に都合の良い史実だけをピックアップしたり、史実を基本にしながらも創作やストーリーを付加するのは、虚構に登場人物を放浪させる小説や文芸の世界である。それは、歴史学の研究対象である歴史とは異なる。

以上を前提に、犬養毅（1855 年～ 1932 年）を記述するに当たり、次の 2 点に注意した。

第 1 は、時系列としての史実に忠実であり、安易な推測や創作はもとより顕彰に値する美徳行為だけを記述するのは許されないこと。

第 2 は、犬養毅の評価にあたり、現在の政治・経済・科学技術などの価値基準で過去を射ることは犬養毅を見誤るということである。

従って以下は、江戸末期から昭和初期に至る激動の闇の時代を追って、日本近代化の光を追求したありのままの『犬養毅の史実』を披露し、時系列による当時の歴史的背景と犬養毅の思想と行動の微妙な変化を記述していきたい。もちろん史実の評価に及ぶところもあるが、筆者見解と受け止めご批判も賜りたい。

そして、①明治 8 年 20 歳のとき裸一貫で上京し、藩閥でも軍閥でもない犬養毅がいかにして内閣総理大臣までになったか。②日本の近代化のため護憲運動、産業立国、普通選挙という高い理念を貫き通した強固な信念と行動力　③大正デモクラシーから 5.15 事件までの木堂が追跡したかすかな光、それが戦後以降もなお実現しつつあること。以上 3 点を『史実の評価』として読み取っていただければ幸いである。

2 【備中国庭瀬の犬養家と犬養毅の家系】

犬養毅は、1855 年（安政 2 年）、備中国庭瀬藩の庄屋において父犬飼源左衛門当済（まさずみ）と倉敷市粒浦小川家出身の母嵯峨（さが）の間に 5 人兄弟の「次男」として生まれた。庭瀬といえば、備中成羽城主三村家親が備前藩宇喜多直家の侵攻に備えて築いた撫川城のあったところで、戦国時代から備前の国と対峙している。備中松山城には江戸当初に一時池田家の入城もあったが、備中庭瀬藩は元禄以降板倉氏が藩主で、備前岡山藩とは対立していた。犬飼家は庄屋とはいえ平民で、武士ではなかった。しかし、名字、帯刀を許されるという庄屋で、犬飼家は代々吉備津神社の社殿守護職を務めた。犬養毅の銅像が彫刻家朝倉文雄によって製作され、吉備津神社のそばに建っている。（写真 1）　犬養毅が自分の家のことを書いた『家記大要』によると、遠祖犬養健命（いぬかいたけるのみこと）は、奈良大和から来た吉備津彦命の随身武士であったという。もともと律令制以前の部民制の時代、大和王権に奉仕した『犬養部』が先祖であることから、律令制前の大和の犬養部は『犬養』であるとして、犬養毅は、自分の代から氏を『犬飼』から『犬養』に変えたのだ。

犬養毅銅像

犬養家を概観してみよう。犬養毅の嫡男の犬養健さんは、東京帝国大学を中退された白樺派の作家で、その後衆議院議員となり、造船疑獄の際の法務大臣まで務めた。その子の犬養康彦さんは世界の情報を発信する共同通信社の社長をされた。同じく孫の犬養道子さんはアフリカ難民支援で大活躍され、2017年7月に亡くなられた。東京の教会で行われた犬養道子さんの葬儀には、天皇皇后両陛下からの献花があり、喪主は犬養康彦・麗子さんの長男の犬養拓さんであった。ひ孫の緒方貞子さんは、元上智大学教授で、JICA 理事長、国連難民高等弁務官として難民、貧困、紛争という地球上の弱者の救済に世界の第一線で活躍されたが、残念なことに 2019 年 10 月 92 歳で亡くなられた。これから述べる木堂を含め、地球を俯瞰するグローバル活動の遺伝子をもった家系である。

3 【漢学勉強、明治維新、父の死】

さて、犬養毅であるが、父親当済は漢学者で『水荘』という号をもっており、犬養毅も父から四書五経を教わっていた。また庭瀬藩医の森田月頼からも漢学を学んでおり、さらに現在の倉敷市庄にあった漢学者の犬飼松窓が開いた私塾の『三余塾』に通い勉強をしていた。この三余塾は、坂本金弥、林醇平など地元の有力者も輩出している。

明治維新といえば、犬養毅が 13 歳のときである。明治新政府の発足直後の 1868 年（明治元年）、旧幕府軍による鳥羽伏見の戦い、いわゆる戊辰戦争があった。錦の御旗を掲げた西郷隆盛ら、長州・薩摩・土佐の藩閥の新政府軍が勝利する。幕府を支援していた新選組も惨敗し、徳川慶喜も幕府の軍艦（開陽丸）で江戸へ敵前逃亡した。明治新政府は岡山藩（池田藩）に錦の御旗を渡して備中松山藩討伐を命じた。備中松山藩の第 7 代藩主板倉勝静（かつきよ）は江戸幕府老中首座となっており、松山城の留守を見守っていた山田方谷は、戦火から領民を守り板倉家存続のため、松山城を明け渡した。その結果、松山藩は岡山藩の支配下に置かれ、鳥羽伏見の戦いに敗れた熊田恰（あたか）が率いる松山藩兵 150 名が備中玉島に帰ってきた。岡山藩は熊田恰の切腹を要求し、熊田恰は自刃し、松山藩は戦火を逃れ無血開城した。一方、老中首座となって江戸幕府の中枢にいた板倉勝静、榎本武揚は、新政府軍と北海道五稜郭に至るまで抗戦したが、山田方谷の説得もあり、新政府軍に降伏し禁固刑を受けるも自刃には至らなかった。13 歳の犬養毅は、この維新の大騒動をどう受け止めていたのだろうか。新政府側についた備前岡山藩と最後まで江戸幕府側についた備中松山藩板倉家は、熾烈な対立関係にあったのだが、年少でもあり武士でもない庶民の犬養毅が明治維新に直接関与できる立場ではなかった。のちほど犬養毅が、維新の元勲である伊藤博文や山縣有朋などを藩閥・軍閥政治家として鋭く批判し、貴族院などの特権階級を非難した背景には、庄屋も継げない裸一貫の庶民の藩閥に反発するエネルギーとプライドが強烈にうかがわれる。

激動の明治維新の年に、犬養毅の父親が突然コレラという病気で 49 歳で亡くなった。庄屋とはいえ、犬養毅にとっては途方にくれ、大ショックであったに違いない。それからの犬養毅は自宅で寺子屋（木堂塾）を開き、生活の小遣い稼ぎのため、近所の子供に漢学を教えていたという。

4 【裸一貫上京、慶應義塾、新聞記者時代】

1869 年（明治 2 年）には版籍奉還となる。翌年には犬養毅は、犬飼松窓教授の倉敷明倫館に母の実家（倉敷市粒浦）から通う。1871 年には廃藩置県で庭瀬藩も廃止となる。1872 年犬養毅は、17 歳で小田県庁地券局（現在の岡山県笠岡市）に勤めることとなる。そこで、万国公報の原書が読みたいと洋学を志す。漢学だけでなく洋学への意欲満々、維新後の激動の東京への好奇心、それが親元を離れての上京の契機となった。

1875 年 20 歳のとき母親の実家である倉敷市粒浦の小川家から 15 円の支援を受けて上京した。生活費も底をつく中、幸運にも小田県庁当時の友人の山口正邦に出会い、郵便報知新聞の主筆藤田茂吉を紹介された。そこで漢学の勉強の素養を生かして新聞記者として勤めることとなる。そのときの上司である栗本鋤雲が、論語の『剛毅朴訥近干仁』（ごうきぼくとつじんにちかし）から、犬養毅に『木堂（ぼくどう）』という

号を付けた。『剛毅』とは力強いありさま、『朴訥』は大樹のごとく無口で落着いていることであり、以下「木堂」とも呼ばしていただく。

しばらくの間、湯島の共慣義塾に通い勉強していたが、翌年、主筆の藤田茂吉を保証人として、慶応義塾に学ぶこととなる。塾長の福沢諭吉は、蘭学者緒方洪庵が江戸時代に大阪に開いた適塾で勉強した人である。『五箇条のご誓文』のベースは、福沢諭吉の『西洋事情』ともいわれている。慶応義塾では、西洋学、とりわけ福沢諭吉の自由民権思想等を学んだ。福沢諭吉は、個人の独立や人権を重視しつつも、国家の独立の必要性も説いたナショナリストでもあったという。木堂は、よき師に出会い、個人と国家のあり方を学び、そのことが将来政治家としての素質を養っていくこととなる。

1877 年､木堂は､『西南の役』に郵便報知新聞の従軍記者として九州の戦場に赴く。兵士とともに寝食し、戦場からの原稿『戦地直報』（106 回分）の大半を郵便報知新聞社に書き送った。西郷隆盛が、西郷自身が築き上げた明治新政府に撃たれたときの戦地ルポは、西郷隆盛の死を悼む名文であった。漢学と西洋学の双方を修得していただけに、戦場からの臨場感あふれる木堂の文筆力は、他社を寄せ付けなかった。

1879 年、福沢諭吉が『交詢社』を設立、木堂は『交詢雑誌』編集にたずさわった。このように福沢諭吉との縁は慶応義塾だけではない。交詢雑誌の中では､木堂が『国民国家』としての「国家」「政府」「民衆」という 3 つの視点から近代日本の政治をとらえていくことがうかがえる。木堂は、幸運にも学問をテコに新聞記者となり、後に政治家を目指す上でよき指導者に巡り合えたといえる。

5 【大隈重信との出会い、伊藤博文等との憲法をめぐる対立】

1881 年（明治 14 年）7 月、木堂は、統計院権少書記官に就任した。明治政府設立の統計院のトップは大隈重信であった。大隈重信は、福沢諭吉に次ぐ木堂の第 2 の師で、後に早稲田大学の創設者となった者である。しかし､『明治 14 年の政変』で、参議であった大隈重信は自由民権派と手を組んでいるとして政府を罷免され、下野した。木堂も統計院を退官、特定の師に従った宿命でもあった。この『明治 14 年の政変』は、我が国の憲法に君主大権のドイツ・プロイセンのビスマルク憲法を導入するか、イギリス型の議会の権限の強い議院内閣制の憲法を導入するかで争われたものだ。前者を伊藤博文・井上馨が主張し、後者を大隈重信とそのブレーンの犬養木堂、尾崎行雄が主張した。尾崎行雄（号を『咢堂』）は現神奈川県生まれで慶応義塾を中退、木堂と同じく憲政の神様、と呼ばれ、衆議院議員に 25 回当選した木堂の親友である。大隈重信は、早急に憲法制定を求めたが、伊藤博文は 10 年先の明治 23 年に国会開設をするとして先送りした。以上のように憲法制定や国会開設をめぐり、木堂の支持した大隈重信・福沢諭吉・尾崎行雄等のグループと、伊藤博文・山県有朋など長州藩閥のグループが対立した。

1882 年､木堂は大隈重信の立憲改進党結成に参画した。木堂は､大隈重信のブレーンとして言論雑誌『日本及び日本人』で、「軍閥」「藩閥」「財閥」の政治を批判した。当時徳川慶喜は、大政奉還をしながらも、西周などとイギリス型の議会の権限が強い政治体制を目指したが、結局、伊藤博文はプロイセン（ドイツ型）の立憲君主憲法の採用をした。

1885 年、明治憲法発布に先立ち、内閣制度が発足した。初代内閣総理大臣には伊藤博文が就任、各大臣も明治維新に功労の薩摩と長州の藩閥出身者がほとんどを占めた。なお、この年木堂は、郵便報知新聞社を退社し、民権派の正論新聞である朝野新聞に入社し、ジャーナリストとして活躍しつつ、後藤象二郎の民権各派による大同団結運動に参加した。こうして木堂は､次第に政治に関心を寄せ､自筆の政論集『政海之燈台』で、「国家」「政府」「民衆」の 3 視点からその調整役をめざすとの立場を明らかにした。　（つづく）

前列が犬養毅嫡男健、後列左から犬養木堂、大隈重信、大隈夫人（明治 33 年、犬養木堂記念館所蔵）

郷土の縄文時代から近代まで 鏡野郷土博物館

鏡野町教育委員会 生涯学習課　主幹　*日下　隆春*

岡山県北部中央に位置する鏡野町に、郷土の縄文時代から近代までを展示する郷土博物館があります。平成 15 年に旧鏡野郷土資料館から移転して総合文化施設『ペスタロッチ館』の 2 階に開館しました。

展示資料は平成の合併以前の旧鏡野町域で出土・収集された考古資料と民俗資料を中心に構成されており、展示コーナーは縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代以降、民俗資料、伝統産業、民俗芸能、中島家関連資料に大別できます。

縄文時代では、昭和 47 年に調査された竹田遺跡から出土した縄文時代早期（約 8000 年前）の土器・石器があります。竹田遺跡では住居跡と思われる杭穴が多数見つかっていますが、この時期の住居跡が複数確認できるのは全国的にも少なく、縄文時代研究において現在でも高い評価を受けています。この他にも町内から出土した土器や乳棒状石斧、石刀など、縄文時代の特徴的な資料も展示しています。

弥生時代のコーナーでも土器・石器などを展示しています。岡山県北部では弥生時代に入ると遺跡数は激減しますが、中期後半（約 2000 年前）頃になると激増し、町内でも多くの遺跡が確認されています。館内に展示している弥生時代の遺物はすべて中期後半以降の遺物になります。布原台地上に位置する九番丁場遺跡では、大型の竪穴住居や当時としては稀少な鉄器や祭祀に使用された人形土製品なども見つかっており、地域の拠点となるような集落の存在が想像できます。

古墳時代のコーナーには、前方後円墳である赤峪古墳から出土した盤龍鏡をはじめとする副葬品や、町内各所から出土した銅鏡や鉄製武器、埴輪などを展示しています。中でも長浜 2 号墳出土の陶棺は、表面に豊かな装飾が施され、展示資料の目玉となっています。

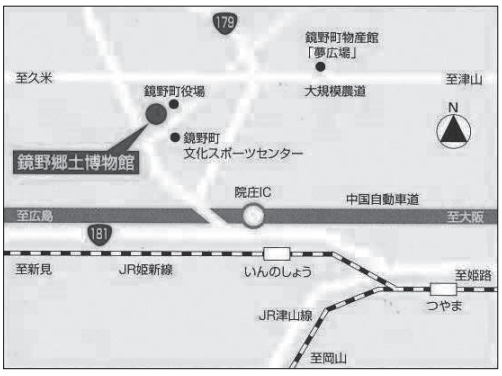
鏡野町内に古墳は約 500 基確認されていますが、そのうち約 470 基が旧鏡野町域に存在します。町域南部は、津山盆地の西端部に位置していることから、集落も多く存在し、古墳の築造に適した緩やかな丘陵が多くあったことに起因するのではないかと考えられます。

奈良・平安時代以降のコーナーの展示品には、長岡京から出土した鏡野町域の地名が記された木簡のレプリカや、中谷神社から寄託された資料を展示しています。寄託資料のうち菊花凹面柄鏡や鰐口には、南北朝時代の南朝の年号が刻字されており、神社の歴史を考える上での貴重な資料となっています。

民俗資料展示コーナーでは、稲作における一連の作業に使われた民具を展示しています。農業が機械化される前から、作業の効率化を目指し、創意工夫を図ってきた先人の知恵を垣間見ることが出来ます。

町内では、気候や地質、植生など、自然の特性を生かした産業が行われてきました。山間部では古くは木工製作を行う木地やたたら製鉄などもさかんでしたが、当館では、近年まで行われていた産業である製茶（中谷茶）や製炭、三椏の生産などを紹介しています。

町内でかつて行われていた民俗芸能の一つとしては、「薪森原の人形芝居」があります。いつ頃から始まったのかは不明ですが、宝暦～明和期（1751 ～ 72）頃には行われていたといわれ、当時の人形師の銘がある人形の頭も残っています。戦前までは盛んに行われ、昭和 6 年（1931）に岡山市で開催された郷土民謡小唄大会で優勝するという輝かしい記録も残されていますが、戦後は生活様式の変化に伴い衰退し、現在は、人形や使用されていた道具のみが往時を偲んでいます。



中島家関連資料は、江戸時代にこの地域の大庄屋を勤めた中島家に関するもので、明治時代初期に美作の民権運動の若きリーダーとして活躍した**中島衛**の事績についてパネルで紹介し、大庄屋関連・民権運動関係の資料も併せて展示しています。

常設展以外でも、テーマを決めて企画展も不定期で開催しており、博物館講演会や体験講座なども随時開催しております。機会がございましたら、是非ご来館ください。

岡山歴史研究会

会 長　石 井　保

岡山歴史研究会

副会長　中 山　亘

岡山歴史研究会

副会長　山 崎 泰 二

岡山歴史研究会

副会長　雪 吉 政 子

岡山歴史研究会

事務局長　山 田 良 三

岡山歴史研究会

会 計　中 山 幸 子

山田方谷に学ぶ会会員

藤 井 義 和

郷土の歴史・経済・文化を語る講師
郷土の歴史・経済・文化研究会

会 長　高 橋 義 雄

〒710-0807　倉敷市西阿知町1131-1
TEL & FAX　086-465-7774

「京都・謎の秦氏ゆかりの地を訪ねる」

令和 2 年度歴史探訪会を 9 月末に「京都秦氏ゆかりの地」へ貸切りバスで開催いたします。多くの皆様のご参加・申込をお待ち申し上げます。

探訪先：京都市内

日　時：令和 2 年 9 月 25 日(金)7:00 ～ 20:00(雨天決行)

定　員：49 名（先着順、定員になり次第締切り）

集合場所＆時間：
次の 2 か所の内､いずれかを指定ご連絡下さい。
- 倉敷駅北口高速バス乗降場　6:45
- 岡山駅西口バス乗降場　7:45

帰着時間：岡山駅 19:00　倉敷駅 20:00　頃

参加費：7,000 円（弁当、飲み物込み）当日集金
キャンセル負担金（後日徴収）
開催の 7 日前 9/18 ～ 2 日前 9/23 は 5,000 円
前日 9/24 ～当日 9/25 は 6,000 円

案内講師：佐藤光範顧問　山田良三事務局長

探訪コースと概要：
①「嵐山・松尾大社」 秦氏の氏寺、大杉谷の磐座がご神体。幹部神職は秦氏。
②「嵯峨愛宕町・愛宕神社」大宝年間に白山の開祖、秦澄により朝日峰に神廟を創建。
③「太秦・広隆寺」秦河勝が聖徳太子から賜った弥勒菩薩を本尊。本堂に聖徳太子像を安置。
④「太秦・大酒神社」秦始皇帝、弓月の君、秦酒公を主祭神とする神社。
⑤「伏見・伏見稲荷神社」和同 4 年 2 月の初午に秦伊呂具により稲荷大神が鎮座。

参加ご希望の方は名前、住所、電話番号、バス乗車駅を明記の上、電話、Ｅメール、はがき、ＦＡＸ等でお申込み下さい。また、同伴者のある場合は連名で同様お申込み下さい。

申込み先及び連絡先：
- 電　話：090-4654-8964　（工藤 博）
- Ｅメール：sw225442@tw.drive-net.jp　（工藤 博）
- はがき：〒710-0803 倉敷市中島 2007-8　（工藤 博）
- ＦＡＸ：086-466-0192　（工藤 博）

10 周年記念誌原稿募集のお知らせ

10 周年記念誌編集委員会

岡山歴史研究会は令和 2 年（2020）10 月に設立 10 周年を迎えます。これを記念して、令和 2 年度末（2021 年春）に 10 周年記念誌を発刊することになりました。

つきましては、記念誌に掲載する原稿を広く会員の皆様から募集いたします。歴研についての感想、提言、やってみたいこと、歴史や文化について思うことなど、何でも自由にお書きください。多数の投稿をお待ちしています。応募要領は下記の通りです。

記

字　数：原則として､**本文 800 字（40 字× 20 行）以内**。（本文の前にタイトルと氏名を入れてください。ただし、字数には含みません。）

執　筆：ワープロソフト（ワード又は一太郎）での作成をお願いします。が､手書きでも構いません。

原稿の送付先：編集委員長　井上知明宛
ワープロソフトで作成された方は、原稿を以下のメールアドレス（井上知明）に添付ファイルで送信してください。
inoueto@gold.ocn.ne.jp
手書き原稿の方は､以下の住所に郵送してください。
〒710-0051 倉敷市幸町 9-45-302　井上知明

締切日：令和 2 年（2020）5 月 31 日

※お問い合わせは井上までお願いします。
（携帯：090-5964-7312）

編集後記

新型コロナウィルスが蔓延して日本中が鎮まり返っている。絶えず動いているのが世の中であることを改めて知らされる。よって、歴史の評価は非常に難しい。

高橋氏の「一県一行」の成り立ち、鈴木商店の倒産に始まった昭和初期の大不況のさ中、中国銀行の誕生の経緯を知った。大原孫三郎の先見の明か、あるいは時代の趨勢か。

板野氏の「犬養木堂」。銅像を見て育った私にとって、明治維新に始まる近代化の中での木堂先生の活躍は興味深い。関東大震災の時の通信大臣で「少々の間違いがあっても構わぬ。日本の金を日本人が使うのだから郵便貯金はおろしてやれ。」と言ったと父から聞いた。私は木堂先生の詩「本来無一物而無塵可拂」（本来無一物而して払うべき塵もない）が好きである。

鏡野町の郷土博物館を紹介してもらった。かつて町庁舎の前に有名な教育者「ペスタロッチ」の像があるので気になっていた。縄文、弥生時代の遺跡、遺物が多く展示してあるとのこと。山陽側の吉備文化しか知らない私には驚きである。是非、見てみたい。　（楠）

発　行　岡山歴史研究会
会　長　石井　保
編集長　楠　敏明
事務局　〒701-0204 岡山市南区大福415-14
山田　良三方
電　話 090-1033-3327 (携帯電話)
ＦＡＸ 086-806-2525
メール okayama.rekiken@gmail.com
ホームページ http://b.okareki.net/